

# 海外華人社会のなかの日本密教

—潮州系ベトナム華人の居士林をめぐる実地調査から—

“Japanese Esoteric Buddhism in Overseas Chinese Societies:  
Findings from the fieldwork on a Buddhist laymen’s organization of  
Vietnamese-Chinese from Swatow (Shantou, Chaozhou)”

芹澤 知広\*

Satohiro Serizawa

## I 研究の発端

本論文は、平成19年度奈良大学研究助成として行われた「海外華人社会における日本密教普及の歴史的・民族誌的研究」について報告することを目的としている<sup>1)</sup>。

はじめに本研究を行うに至った経緯について説明をしておきたい。私は1993年12月に初めてベトナム・ホーチミン市を訪れて以来、断続的かつ短期的ではあるが、ホーチミン市の華人社会のなかで、とくに宗教に焦点をあてて歴史的・民族誌的な実地調査研究を続けている<sup>2)</sup>。ベトナムでは、1975年の南北統一と1978年から79年にかけての中越紛争をきっかけに、多くの華人が出国した。しかし1986年に始まる対外開放政策、「ドイモイ」の後、華人がもつ海外とのコネクションはベトナムの経済発展へ大きく貢献することが期待され、とくに華人を多く擁してきたホーチミン市のチョロン地区では、華人の民族文化の復興が顕著に見られるようになった。

私の調査は、華人社会の互助組織を代表する同郷会館を訪問することから始まった。ベトナムでは、阮朝時代とフランス植民地時代を通じて、「五幫」と呼ばれる5つの華人の下位集団の分類が中国系移民の統治に使われた。この下位集団の分類は華人の社会生活上、今も重要性をもっている。この分類は、一般には「広府」「潮州」「福建」「海南」「客家」の5つの方言集団にもとづくものであり、ホーチミン市においては、多数派を占める「広府人」（広州周辺に祖籍を持つ人びと）の話す広東語が共通語のように通用している。また、次に大きな人口をもつ「潮州人」（広東省東部の潮州地方に祖籍をもつ人びと）も商業活動での活躍が目覚しく、その主要な会館である「義安会館」や、その他の小さな会館、ボランティア組織の活動などに大きく貢献している。いっぽう3番目に人口が多い「福建人」は、現在それほど目立たないが、複数ある福建人の会館と仏教との歴史的な結びつきについて調査の過程で明らかになってきた。そのため、ベトナム

ムの共同研究者の協力も得ながら、近年は仏教寺院を多く訪問するようになった<sup>3)</sup>。

2005年夏の調査では、20世紀になってからフランスが避暑地として開発した中部高原の都市グラットを訪れた。グラットは高原で恵まれた環境にあるため、ホーチミン市の僧が「夏安居」として過ごすような寺院も多く建てられている。その調査のなかで、1997年にホーチミン市で面識を得た潮州人男性、M氏と再会した。彼はちょうど奈良の長谷寺での修行を終えてベトナムへ戻ってきたところだという。数日後ホーチミン市へ戻り、その寺院と関係の深い居士林を訪れた。そして、真言宗豊山派の総本山、長谷寺との歴史的なつながりについて初めて知ることになった。

なおグラット滞在中に起きた、不思議な人間のつながりについての別のエピソードを、ここに書き加えておきたい。調査期間は、ちょうど旧暦の7月にあたっており、宗教施設では盂蘭盆の儀礼に関係者は忙しくしていた。仏教寺院や民間信仰の廟を訪問すると、僧侶や信徒と食事をもにすることも多かった。ある日の夕刻、知り合いになったベトナム人（キン族）僧侶が、一緒に食事をするレストランへ案内してくれた。町外れにあり、店頭にベジタリアンの惣菜を並べ、店内でも麺類など簡単な食事を取ることでできる小さな精進料理の店である。そこで一緒に食事をしていると、たまたま、ある老年女性が客として入ってきた。彼女は、この僧侶を知っているようで、私たちのテーブルについた。そして、私が日本人であることを認めると、突然次のような言葉を英語で投げかけてきた。「あなたは日本人か。日本人ならアキミを知っているか。」

私はちょうど東京で石本暁美氏のことについて聞いたばかりだったので、その「アキミ」のことが直感でわかり、「会ったことはないが、知っている」と答えた。英語での言葉のやりとりから、この女性が、石本暁美氏が生前ベトナム旅行をした時の通訳兼ガイドだとわかった。石本氏は、本誌の第17号に紹介したが、日本人によるベトナム・ホイアンの町並み保存の先駆けとなった人物である<sup>4)</sup>。

グラットは、映画化された林美美子の小説『浮雲』の舞台として、日本人には昔からよく知られた観光地である。また石本暁美氏が亡くなってからは、すでに10年以上も経っている。そのような条件のなかで、寺院をいくつも訪問した後に、小さな精進料理の店に入り、私の知っている日本人に関わったベトナム人と偶然出会うことになった。

そのグラット滞在中に浮かび上がった奈良とベトナムのあいだの仏教をめぐる不思議な縁に導かれて、私は関係の深い場所をいくつか訪れることになり、これまでのところ、なるべく多くの情報を集めるように努めている。とくに2007年の夏には、奈良大学総合研究所の研究助成を得てカナダへと渡り、トロントにて実地調査を行った。しかし、本研究に関わる宗教結社が生まれた中国広東省潮州地方など、重要な場所のなかには、まだ実地に訪れたことのない場所が多く残されている。また潮州人の文化や、密教そのものに対する私の理解が不十分なため、得られた情報を明確に整理するには至っていない。そのため本論文は、今までの実地調査についての中間報告とならざるをえない。

以下、先行研究にもとづいて20世紀前半の日本密教の中国への再輸出、「密教重興」の歴史的経緯を紹介する。そして近年の展開について香港、ホーチミン市（サイゴン）、トロントという場所に焦点をあてて報告し、そこから窺える潮州系ベトナム華人の宗教結社の特徴について指摘したい。

## Ⅱ 先行研究の検討

明治維新以降、1945年に敗戦を迎えるまで、日本が国策として行ってきた台湾や中国大陸への軍事的な介入と、時間的・空間的に重なる日本仏教の海外開教の歴史を、今日冷静に振りかえるということには技術的にも政治的にもむずかしい問題がある。廃仏毀釈を経て海外に活路を見いだすことを試みた近代日本の仏教は、早くも19世紀から中国大陸に進出しており、とくに浄土真宗は多くの寺院を建設している。この近代史を俯瞰し、今日の立場から全般的な評価を下すということは、私の手に余る問題である。

本論文に関わりの深い真言宗豊山派に限っては、その「密教重興」の起源について、すでに多くのことが明らかとなっているが、いっぽうで、その歴史的全般的な回顧と現状の詳細な把握については、教団全体で取り組まれるまでには機が熟していないようである<sup>5)</sup>。

しかし本研究に関わって、近年豊山派の僧籍をもつ研究者から、次の3点の重要な先行研究が出されている。藤森孝道の1998年の論文「真言密教重興と海外居士林」、田中文雄の2004年の論文「密教重興とその後 - 日本仏教と中国在家教団の八十年 -」、そして、田中と川城（旧姓藤森）が最近共著で発表した論文「豊山開教略史稿 - 密教重興から居士林御親化へ -」である<sup>6)</sup>。

藤森孝道の1998年の論文は、戦前・戦中の中国巡教と戦後の香港・ベトナムの居士林との交流について概観し、年表のかたちで、その間の主な出来事を紹介したもので、最近の共著論文の第二章がその改訂版にあたる。田中文雄の論文は、内部出版物の『真言宗豊山派宗報』のほか、藤森の論文を含め、重要な基本文献を用いて、1920年代の密教重興から、日中戦争下の状況、そして最近の交流までを歴史的に記述している<sup>7)</sup>。また最近出された田中と川城の共著論文では、田中は第一章を担当し、前稿に比べて戦前・戦中の中国仏教と日本仏教との交流にも視野を広げ、中国人僧の「東密」（日本密教を指すが、とくに天台宗の「台密」との対比では真言宗を指す場合が多い）学習熟にも言及している。資料としては、当時中国の仏教近代化を推進した太虚が中心となって出版した雑誌『海潮音』を用いている<sup>8)</sup>。また、戦中の中国巡教の状況を、当時護国寺が出版した『華南巡錫』を詳しく引用することから紹介している。

## Ⅲ 20世紀前半の中国における密教重興

上記の先行研究とは、あまり重ならないようなかたちで、戦前・戦中の中国における密教重興について概略を紹介しておきたい。

弘法大師・空海が8世紀に中国から日本へと伝えた密教は、中国ではその後途絶えてしまった。そのため、近代になって中国のなかから日本の密教を再び中国へ持ち込もうとする試みが始まった。豊山大学（後の大正大学）学長の権田雷斧が、1916年に東京帝国大学で講じた密教についての講義録、『密教綱要』が同年に出版され、その書物を1919年に王弘願が中国語訳し、中国で出版した。王は、広東省潮州地方の潮安県の出身で、潮州金山中学で教鞭を執っていた。1924年に権田は、高齢にもかかわらず、船に乗り台湾経由でスワトウ（汕頭）へ向かい、潮州の開元寺で王ほか6名に伝法灌頂を行った。これが真言宗豊山派による「密教重興」にあたる。

黄英傑の社会学論文「台湾地区四十年来密宗の変遷」によると、台湾では「唐密」という言葉を使い、中国で密教は禅宗のなかに伝えられていたという説明をする僧もいるという。しかし中華民国期に、密教が中国で衰退していたことは明らかであり、密教を再興するうえでは、日本がチベットに頼らざるをえなかった。日本からは、1921年に覚隨が北京へ渡った。そして中国からは大勇が日本へ留学し、高野山天徳寺で密教を学んだ。しかし、1924年に日本密教を最初に普及させた大勇がチベット密教に転じ、1937年に日中戦争が正式に始まると、日本密教は中国で衰退していった。黄英傑は、日本密教の普及と衰退の原因をいくつか検討しており、当初日本密教を唱導した諸僧がチベット密教を学び始めたことの打撃を重く考えている。そして日本密教の流行が、もともと日本による宗教を用いた中国懐柔策と関係していたため、政治的な要因で衰退していったとも指摘する。そのうえで次のような興味深い指摘もしている。日本密教の流行は上海、杭州、武漢など一部の都市に限られてはいたが、庶民が密教を学ぶという風潮をもたらした。以前の王朝時代には、密教の研究は宮中に限られており、それを突破する新しい現象となった<sup>9)</sup>。

また、近年中国本土で出版された肖平の研究『近代中国仏教的復興 - 与日本仏教界的交往録』では、王弘願が太虚の支持を得て、『海潮音』や『世界仏教居士林月刊』に続々と日本語の密教関係書籍を中国語訳して掲載していったことについて、当時の日中の政治関係を踏まえ、日本側にとっては願ってもいない、いいニュースになったと指摘している。それ以前には、浄土真宗を始めとして日本仏教界は中国への伝教の機会を探していたが、中国政府と中国仏教界は、日本の仏教団体の活動を警戒していたため、日本側の計画はうまく進んでいなかった。とくに中国の仏教徒が主体的に動いて日本の仏教界に近づくことはなかった<sup>10)</sup>。

#### IV 香港

1924年に権田雷斧は、潮州からの帰途、中国人信徒、黎乙真に求められて香港へ寄り、儀礼を授けた。黎は、1926年に香港に「香港仏教真言宗居士林」を設立した。また、黎の弟子で夫人の張圓明が「香港仏教真言宗女居士林」を1930年に設立した。

『黎阿闍梨乙真居士降生百週年紀念会刊』と『華南巡錫』によると、黎乙真は、広東省高明県の人で、父の黎澤田が太平天国の乱の時に難を逃れて香港へ移住した。黎澤田は、英語ができたため、イギリス人の撮影助手となり、その後自身が「華芳影相館」という写真館を経営した。乙真は、1870年に生まれたが、13歳の時に母の何氏が亡くなり、広州の海福寺の僧に回向を求め、「大悲心陀羅尼」を授けられて、それを唱えた。そのころから密教との因縁があったという。その後、慈善活動に貢献し、「青山禅院」や「九龍禅院六祖経堂」を通じて仏法を広めた。1920年に大藏経を読んで、その秘密部に至り、この密教の法が中国に残されていないことを嘆き、1924年に権田雷斧から灌頂を受けた。そして翌年には、日本へ渡って伝法灌頂を受け、両部伝法大阿闍梨となった。1926年に香港の禮頓道にて始めた居士林は、1928年に光明台に移り、1930年に隣接して女性のための居士林ができた。そして1937年、300名を超える弟子を残して死去した<sup>11)</sup>。

この2つの居士林は、第二次世界大戦後も、光明台の同じ場所で関係者やその子孫が維持してきた。そして、1991年には2棟の近代的な高層ビルに建て替えられた。

2005年9月の訪問時に聞いたところでは、建て替え以前に光明台にあった3階建ての居士林は、香港の富裕な商人、胡禧堂（2008年に死去した香港の著名な法律家、胡百全の父）が寄付して建てられたものだという。現在も胡氏の祠堂のコーナーが独立して居士林の4階に設けられている。「胡忠恕堂」という堂名が掲げられ、反対側には同じく初期のパトロンとなった蔡氏一族の祠堂にあたる「蔡慶同福堂」のコーナーが設けられている。

戦後、光明台のある香港島の山際には、中国本土からの難民が多く流入し、バラックを建てて住み着いた。その地区の子供たちを対象にした無料の夜学を居士林のなかで開いていたため、その時に真言宗について知った人など、戦前からの関係者の子孫のほか、新しく加わった信徒もいる。現在この建物で活発に活動するメンバーは、女性が70数人、男性が30数人いるという。戦前の設立当初は、会員制だったため、メンバーが100人を超えることはなかったらしい。

香港仏教聯合会が発行する『香港佛教』の記事によると、この香港真言宗居士林の慈善学校（「義学」）、「仏教光明義学」は、香港の仏教寺院の経営する学校の先駆的なもので、1930年から1970年まで開かれていた。戦後は、女居士林の主席であった周慶覚が校長をつとめていた。また、張圓明が土地を寄付して1925年に開設された「青山仏教義学」（上述の「青山禪院」の経営）も、香港最初の仏教系慈善学校である<sup>12)</sup>。

この香港の居士林では、経を読む時には広東語の発音を用い、真言を唱える時は日本語の発音に似た発音になるという。私が訪問した日は、ちょうど「地藏菩薩誕」の日で、その儀礼の前に精進料理の昼食に誘われた。中華料理の精進料理だが、もち米を丸く固め、縦長に立てたものの脇に小豆を固められたものが添えられた、日本の「おはぎ」にあたるものを載せた皿があった。この料理については同席した信徒たちも日本の影響であることを認めていた。

また、奈良の長谷寺には、香港の居士林の信徒が修行中に宿泊する「道場」の建物が1982年に



写真1：長谷寺境内にある「香港居士林研修道場」の建物

建てられている（写真1）。近年、ベトナムなどから修行に来ている人びともこの建物に宿泊している。

なお、戦前には香港のほか、広州にも真言宗の居士林があった。著名な六榕寺に「解行精舎」が設けられ、日本の密教の研究が行われていた。王弘願は1933年に、中山大学で密教についての講演を行っている。私は汕頭・広州の真言宗の現状について未調査だが、潮州の社会・文化について調査をしている香港の研究者からは、現在の汕頭でその痕跡を見いだすことがむずかしいということを聞いている。

## V サイゴン（現ホーチミン市）

1930年代の日中戦争による中国東南沿岸部の荒廃と、引き続き国共内戦、1949年の中華人民共和国建国は、広東省・福建省の人びとのベトナムへの移住を促す大きな要因であった。とくに香港同様、戦前から広府人と潮州人を多く受け入れてきたベトナム南部では、その地からの移民が流入するとともに、革命のなかで中国本土では失われたその地の地方文化や宗教が再興された。

明月居士林は、戦後に潮州からベトナム南部へ来た商人たちの宗教結社として始まった。サイゴンのなかのチャイナタウンとして知られるチョロン地区に本部（「総林」）をもち、他にもメコンデルタの諸都市に5つの支部（「分林」）を設けた。当初は「扶乩」（ふけい）と呼ばれるシャーマニズムの儀礼によって主神（「祖師」）の啓示を仰いでいた。しかし、1968年の元宵節の晩に、本格的に密教を学ぶようにという啓示が降りると、密教を研究する結社としての性格を強めていった。

設立時の中心メンバーの一人K氏は、香港の「香港仏教真言宗居士林」にいた潮州人僧、李開耀に教えを乞うた。さらに李が死去してからは、日本へと渡り、長谷寺で修行をした。上述したように、香港の居士林では広東語が用いられており、創設者も高明県出身で、メンバーは広府人が中心である。しかし、戦後汕頭から香港へ逃れたこの潮州人僧を介して、ベトナムの潮州人との接点もあった。

明月居士林の歴史については、チョロンの本林の壁に現在掲げられている「明月居士林創立略言」という文章に基づいて紹介したい。明月居士林は、チョロンの馬舎街41号に当初12人のメンバーで、「李道明祖師」と「宋禪祖師」を祀り、その啓示を仰ぐ「明月善社」として始まり、1947年から仏教の祭壇を設けて「明月居士林」とした。その後、「義安学校」〔チョロンの義安会館の経営する学校〕の校長を退いた杜騰英がここで仏教を講じるにつれて、信者が増えていった。杜騰英は、スワトウにいた時に王弘願の弟子となり、浄土宗と密教の両者に通じていた。そして、居士林は同じ馬舎街の26-33号の「雪鴻俱樂部」の建物へと移り、1954年にその土地と建物を買収して現在の居士林の基礎固めをした。そして、当時の政府に届け出て、南部仏教の正式組織となった。

「宋禪祖師」については、ダラットの永福寺に1966年に設置された「宋禪祖師傳略」という石碑の碑文から紹介したい。宋禪祖師の俗姓は宋で、広東省恵来県に1568年に生まれた。30年以上、仙人の李道明〔道教の「八仙」の一人、李鐵拐と同一神格と見なされている〕を思い続けたとこ

ろ、李道明の啓示と仏縁とにより、1633年に隣接する普寧県で出家し、法名を「超月」とした。当時、この地は戦火に見舞われたため、中国各地の名山、聖地を巡り、禅の修業を続けた後、恵来県に戻った。そして地元の有力者の支持を得て、1672年に県城の東に永福寺が建てられた。李道明師の力を受けた超月法師を慕って、広東省東部の人びとが多く帰依した。この地を早魃が襲った1682年には、民衆の救済に奔走し、上流階級からの援助を集め、飢饉を免れるよう尽力した。その後人びとは法師を「活仏」と呼ぶようになった。法師は30年間、座禅に打ち込み、1704年の元旦からは絶食して、同年11月14日、座禅をしたまま136歳で生を終えた。そして、法師の徳を伝えるために、地元の有力者が援助して法師の遺体を即身仏として祀った。その香火〔宗教の勢力〕は潮州地方一帯に及び、扶乩を通じて発揮される宋禅祖師の霊能は、病氣治しに大いに効果があった。人びとは、海豊県神泉鎮、潮陽県大布郷、マレー半島のペナン、香港の九龍にそれぞれ善社を設けて、死者と生者に対する慈善活動を行った。ベトナムでは、明月居士林は当初は善社であったが、後に三宝を祀った。そしてその間、ソクチャン、バクリウ、カマウ、カントー、サデックに分林を設け、「贈医施薬」〔無料の医療サービス〕を行った。

「明月居士林創立略言」と「宋禅祖師傳略」から、興味深い点がいくつもわかる。李道明の「明」と超月の「月」から「明月善社」の名前が取られている。道教的な要素と仏教的な要素の融合は、18世紀以降、超月法師が亡くなって信徒による明月善社が成立した後にも、引き継がれている。現在の明月居士林の本林も、「釈迦牟尼佛」が単独で祀られているが、別の階で並んで祀られている二柱の祖師像のうち李道明の容姿はいかにも仙人のものであり、私には「道教的」と感じられる。私を案内してくれたM氏は、明月居士林が道教的であり、かつ仏教的であることを、「前道後佛」という言葉を使って説明した。前面に見えている道教を手がかりにして入門し、理解が深まると、後ろにある仏教を学ぶという構造になっているという。

また、慈善結社としての「善社」と、在家仏教徒結社としての「居士林」とが、概念のうえで区別されているということも碑文の文章から読みとれる。善社が贈医施薬のサービスを行ううえでは、扶乩が重要な活動になっていたと想像できる<sup>10)</sup>。チョロンの明月善社は、扶乩を行う「壇」としては、「可笑壇」という名称も持っていた。現在も建物のなかに「可笑壇」という文字の入った「乩書」(神が人に乗り移って書いた詩文)がいくつか掲げられている。このほか「南壇」や「二分善社」という文字も見える。これは、かつて潮州にあった壇を「北」にある「本壇」と見て、ベトナムに設立された善社を、その「南」の「分壇」だと位置づけていたことの表れだと考えることができよう<sup>11)</sup>。なお、本格的に真言宗を取り入れるようになって以降、明月居士林では扶乩は行われていない。

中国の「祖庭」に因んでグラットに永福寺が建てられたのは、1968年である。それよりも前に、現在も存続するメコンデルタ地域の5つの分林が設立されている。メコンデルタ地域に入植している華人は広府人よりも潮州人が多い。とくにバクリウは、「小潮州」と言われるほど、潮州人の集住が顕著である。

分林は「第一分林」など、設立の順序によって序数を付けて呼ばれている。1972年にベトナム華人が中国語でベトナムの歴史をまとめた『越南文献』によると、ソクチャンの分林は1958年、バクリウとカマウの分林は1960年、カントーの分林は1962年、サデックの分林は1965年にそれぞれ

れ設立されている<sup>15)</sup>。

なお、トロントでのインタビューで聞いたところでは、南部での展開以降、1970年代には中部にも信徒を増やし、フエとファンラン（Phan Rang、「藩郎」）の2箇所に分林の設立が予定されていたという。しかし、1975年のベトナム統一によってその機会は失われた。

## VI トロント

1975年のサイゴン陥落と南北ベトナムの統一は、ベトナム南部の富裕な華人にとって苦難の時代をもたらした。明月居士林の中心人物、K氏は、台湾で学びカナダへ移民していた息子と娘を頼ってベトナムを出国し、1978年にカナダのトロントに移民した。

私は2007年8月から9月にかけてカナダへ渡り、トロントの明月居士林を訪問した。そこでは現在の責任者である、K氏の長男、L氏の案内を受けた。L氏は父のK氏の呼び寄せによってベトナムからカナダへ移民した。



写真2：トロントの明月居士林

このトロントの分林は、1982年にヨーロッパ風の住宅を買って設けられた（写真2）。トロント大学やチャイナタウンに近い市の中心部の便利な場所にある。カナダには、このほか、アルバータ州の州都、エドモントンに分林がある。アメリカ合衆国とオーストラリアにも分林がそれぞれ3つあるが、トロントの分林はオーストラリアとは最近あまり連絡がないらしい。真言宗豊山派との交流は活発で、L氏が長谷寺へ修行に出かけたりするなどの活動が行われている。私が訪問した時にも、近日アメリカ合衆国とカナダを訪問する豊山派の団体がこの分林を訪れるということを知った。

3階建ての建物の1階には、テーブルが置かれている。接客と事務、そして休憩にも使われているようである。私が訪問した時には、ラジオからは中国語（広東語）の番組の音が流れており、老年男性が1人、窓際に座って中国語新聞を読んでいた。中央の壁には、仏光山（台湾の著名な仏教団体）の星雲大師が揮毫した「明月居士林」という額と、チョロンの総林にあった設立当初の李道明師と宋禅祖師の乱書を書き写した額が掲げられている。2階には千手観音像が祀られており、その向かって右の壁には二十八羅漢像が並べられている。3階は、向かって右に「道明祖師」、左に「超月祖師」の像がそれぞれ祀られてあり、その前には密教の儀礼を行うための壇が設けられている。また右側の壁には死者の位牌が並べられ、左側の壁には、「長生位」（生前に用意した位牌）が並べられている。そして、地階は食堂になっている。

私が訪問した時期は、ちょうど盂蘭盆の時期にあたり、玄関近くには祭壇が設けられていた。そこで袈裟を着た老年女性が、片手で持つ小さな鐘を鳴らしながら、潮州語で読経をするのを最初の訪問時に見かけた。また別の日にあたる日曜日の午前、「盂蘭盆勝会」の最終段階の儀礼の一貫として行われる「斎天科儀 酬謝法会成就仏天典供」を見学することができた。

この儀礼は、2階の千手観音の向かい側に壇を設け、そこに向かってL氏が立ったまま儀礼を行う。L氏は、左側が赤で右側がオレンジ色の派手な衣装を身に付けて、左手には数珠を持っている。衣装の首の後ろには豊山派のマークが入っている。時には香炉に焼香したり、時には右手に柳のような木の枝を指した小さな花瓶を持ち、そこから筆のような木製の法具を動かしたり、枝を抜いて清めるような動作で水を撒いたり、忙しく動いている。

その間、20人ほどの人びとがその周りに立ち、楽器を鳴らしながら読経を続ける。唱和する経文は、潮州語で読まれている。楽譜台に広げられた本を見て、文字通り、「一緒に歌を歌うように」唱和している。周りの人びとの衣装は、黒い中山服のような丈の長いもので、首の後ろには真言が一文字書かれている。そして肩には、透き通った黄色の袈裟を掛けている。多くは老年女性であるが、中には中年の男性と女性が数人混じっている。彼らが用いている楽器は多様で、太鼓や木魚、小型シンバル、鐘などがある。鐘も大きなものから小さなものまで、吊るしたものから、片手で持って鳴らすものまで、様々なものがある。

壇には紙の位牌が立てられている。3柱あり、それぞれ右から、「南無娑婆教主本師釈迦牟尼文佛」「南無盡金光明経中十方常住三寶」「南無第一威徳成就衆事大功德天」と書かれている。その前に供物が並べられている。供物には、ベトナムの永福寺で私が見たことのあるピンク色をして半円状の潮州人特有の餅や、ベトナム特産のドラゴンフルーツも含まれている（写真3）。

儀礼が行われている間も老年男性たちの何人かは、1階のテーブルに座って新聞を読んだりしながら、休憩している。いっぽうL氏は休憩もなく、1時間を過ぎて2階の儀礼が一段落すると、3階へ上り引き続き儀礼を行っている。その間、2階が10分間休憩になると、私は先日玄関近くで儀礼をしていた女性に、読んでいる経についてたずねた。「お経を覚えていないから、本を見るのよ」とのこと。ふだんは台湾で出た陳文富編輯『佛門必備課誦本』（佛教出版社印行）を使うが（この儀礼でも部分的には使う）、今回は特別に『金光明懺斎天科儀』という本を使っている。

L氏の儀礼がすべて終わると、地階での精進料理に招かれた。食卓についた人びとは、皆が潮

州語で話しをしている。となりに座った男性は私と広東語で話してくれるが（トロントでは香港からの移民が多いため広東語はかなり通じる）、私は潮州語ができないので、潮州人同士の話について行くことはできなかった。「白粥」（広府人の粥は味を付けて煮込んだものであるのに対し、潮州人の粥は日本の「おかゆ」に似ている）など、精進料理にも潮州らしさが感じられた。粥と一緒に食べるために用意された佃煮のような漬物も潮州のものであるという説明を受けた。



写真3：トロントの明月居士林で供えられた潮州人の餅

## Ⅶ 潮州人宗教結社としての諸特徴

ベトナムとカナダの明月居士林の調査のなかで私が見いだした、もっとも重要な事実は、日本密教を奉じる、この海外華人社会の宗教結社が、潮州人によるものであり、潮州の文化の影響を大きく受けたものであるということである。M氏は、初期の段階で、この組織は「純潮州」だと私に説明していたが、活動を観察する機会が増えるにつれて、そのことを実感するようになった。

第1に、メンバーシップが潮州人に限られているということがある。カナダ・トロントの分林での観察からは、この居士林が、潮州系ベトナム華人の「たまり場」のような場所であるという印象を受けた。トロントは古くからチャイナタウンがあり、近年は香港、台湾、中国本土からの移民を多く受け入れている。潮州系の華人は、1970年代以降にベトナムから来た移民以外にもトロントに多く居住している。しかし、この分林では「ベトナム系」かつ「潮州系」であることがメンバーシップの暗黙の条件になっている。

トロント滞在中、この居士林の近くに寺を構え、長く英語を使って西洋系の住民を対象に禅を教えている韓国人僧侶から、私はトロントの華人仏教寺院のいくつかを紹介された。この僧に明

月居士林について話を向けると、「仏教というよりは道教と仏教のミックスしたものだ」という説明で、トロントのアジア仏教寺院に含めることには否定的であった。確かに私の観察にもとづくと、トロントの他のベトナム華人にゆかりのある寺院では、明月居士林とは違って、仏教に関わりをもとうとするトロント住民の様々な層を受け入れているように思われる。ある寺院では、西洋系の男性修行者1名が、他のアジア系の信徒と同じく灰色の法服を身に付けて座り、一緒に読経していたのを見た。また、潮州系ベトナム華人僧が住職をつとめる別の寺院では、私が潮州系ベトナム華人の尼僧と話をしている間に、インドから移民した華人女性信徒が質問に来て、その尼僧は中国語（普通話）で応対をしていた。

なお、近年トロントの明月居士林では中国本土出身の参拝者が増えているという。L氏の説明では、中国本土からの移民が増えたということと、この分林が「義山」（共同墓地）を持っていることが原因だという。トロントの郊外に2つの義山を持ち、その区画を分譲しているが、1つは、すでに300ほどの区画をすべて売り切った。義山に墓所を購入することから、この居士林と縁ができる華人もいるようだ。L氏によると、現在の「林友」（信徒）は300人ほどで、そのうち日曜に参拝に来るのは100名ほどだという。



写真4：60周年記念式典当日のホーチミン市の明月居士林

第2には、使用言語としての潮州語がある。明月居士林のメンバーがお互いに話す時の言語と仏教儀礼や式典で用いられる言語とは、ともに潮州語である。私は、2007年10月にベトナムの総林で行われた、明月居士林創立60周年の式典に出席した（写真4）。その時も潮州語が主として使われていた。司会の若い男性は、まず潮州語で話し、同じ内容がベトナム語でも通訳された。司会をはじめに、出席者のなかで多数を占めるホーチミン市の華人仏教界を現在牽引している僧尼たちなど、主要な来賓を紹介したが、紹介された来賓のなかには義安会館の関係者も含まれてい

た。続いて、この総林の指導層3名が挨拶をしたが、これも潮州語で話し、ベトナム語の通訳があった。

第3に、祭祀の対象として潮州地方に特有の神仏が選ばれているということがある。宋禪祖師の祖廟、永福寺は現在の掲陽市恵来県にあり、宋禪祖師の信奉者は潮州地方一帯に及んだという。

第4には、潮州地方特有の食物がある。信徒が居士林でともにする食事や、祭祀する神仏への供物にも潮州地方に特有の食品が用いられている。また、私がトロントの分林を訪れた時には、潮州地方特有の「功夫茶」（濃いウーロン茶を小さな茶碗につぐ）でもって、もてなされた。

## Ⅷ 小結

「密教重興」についての先行研究は、日本と中国の関係、日本人と中国人の交流という側面に多く焦点があてられているが、前節で整理したように、ベトナム系華人の居士林の活動の実際を見てみるならば、潮州人の民族文化の表出という側面からアプローチすることの重要性に気づかされる。

それでは、中国の潮州からベトナムのサイゴンへ、どのように日本密教の信仰がつながっていったのであろうか。この点については、不明な点も多い。『華南巡錫』には、1943年に、護国寺住職の佐々木教純がスワトウを訪れて灌頂を行った時に、わざわざサイゴンから中国へと急遽帰国し、サイゴンに密教重興会の支部をつくりたいという希望を述べた熱心な華僑信者がいたことが書かれている<sup>16)</sup>。しかし、この人物が誰なのか、氏名が書かれていないためわからない。

なおL氏によると、かつての潮州の真言宗の居士林は、スワトウに多かったという。1925年澄海県生まれのL氏は、8歳の時に父親に連れられてスワトウの居士林へ行き、密教に帰依した。子どもの時、肌にかサプタができたりして体が弱かったが、密教に帰依してからは丈夫になったという。

当時、潮州の人びとにとって、日本密教がどのように受け入れられたのかという問題は重要であるが、私の研究不足のため今のところ十分な解答を与えることができない。宋禪祖師の略伝からも想像できるように、扶乩によって祖師の啓示を受けることや、祖師として過去の著名な僧が選ばれることは、潮州人の宗教によく見られる特徴である（なかでも海外の潮州人が多く祀っているのは「宋大峰祖師」である）。また、この扶乩の伝統のなかから、1930年代には「徳教」という新宗教が生まれ、現在も香港、タイ、シンガポール、マレーシアなどの潮州人社会では大きな勢力をもっている<sup>17)</sup>。さらに潮州では、カトリックやプロテスタント（とくにバプティスト教会）のキリスト教の宣教も盛んに行われていた。この宗教の生態学的環境のなかで、日本密教がどのように位置づけられたのかについては、今後の検討課題である。

このことに関して、現時点での仮説にすぎないが、前述のL氏の入信時の説明や、L氏が中国医学の薬材の商売に長年従事していたこと、そして、父親のK氏がサイゴンで著名な中国医学の医者であったことから推測すると、空海の伝えた密教のもつ、病氣治しの儀礼や医業に関わる経文の知識が、潮州人社会のなかのある層に歓迎されたことは想像できる。

いっぽう、サイゴンからトロントへの日本密教の流れについては、先行研究から詳しくわかっ

ている。とくに1975年にベトナムを訪れた星野宥清師が、1980年になって林友からの連絡を受け取るという劇的なエピソードについては、藤森論文にも田中論文にも触れられている<sup>18)</sup>。

私も60周年の式典の時に、ホーチミン市の総林にて星野師からこのエピソードを直接聞くことができた。これで最後の飛行機と言われた時に帰国したので、星野師は1975年のサイゴン解放の直前までベトナムにいたという。その最後の時期、この総林で知り合った人に、自分の名刺の裏に「南無大師遍照金剛」と書いて渡し、お互いこれを唱えていれば、また必ず会えると言って別れた。そしてその名刺をもっていた人がフィリピン・パラワン島の難民キャンプにいたことがわかり、日本の国際赤十字社から電話があったという。さらに、その人はK氏が今どこにいるのかを心配していた。台湾かカナダにいただろうということで、その人はカナダを探し、星野師は台湾を探した。すると台湾にいるK氏から電話が入ったという。

星野師は豊山派宗務所の要職をつとめ、かつて香港やベトナムへ多く渡っていたが、1980年代以降のトロントの居士林と豊山派との交流は、教団による組織的なものというよりは、星野師の個人的な活動によるところが大ききようである。そして今日の活発な交流は、「法脈〔中国の恵果阿闍梨から伝わった弘法大師の教え〕が流れればいい」、あるいは、「うちの宗派〔真言宗豊山派〕のものにする気持ちは全然ない」という星野師の幅広い視野、仏教観、人間観がもたらしているもののように思われる。明月居士林で行われていることと日本の真言宗の寺院で行われていることとはおそらく違うのではないかという私の印象を言って、率直に意見を求めた時に、星野師は、「ひとつの山に登るのにはいろいろな行き方がある。頂点に着いたら一緒。みんながうれしい。」という答えを与えてくれた。

また星野師によると、ロサンゼルス市の明月居士林では、地元の西洋系のアメリカ人が「飛び込み」で来ているという。前月にあたる2007年9月に団体で訪れた時には、「長谷寺和讃」という「ご詠歌」を歌ったが、その飛び込みで来たアメリカ人たちも、歌っているうちに覚えていったらしい。私の今までの調査からは、密教をめぐる日本と中国の交流の歴史に端を発した今日の明月居士林のもつ、潮州系ベトナム華人の宗教結社というローカル文化の側面ばかりが浮かび上がり、日本と中国という2つの文化のあいだの関係を越えるような側面については眼に入らなかった。アメリカ合衆国やオーストラリアの分林の実地調査も含め、日本密教、あるいは中国密教のグローバル化については今後の課題としたい。

最近、天理大学地域文化研究センターの共同研究会の成果をまとめた論文集『グローバル化のなかの宗教』の序文のなかで、住原則也は「ナラロジー (naralogy)」という造語を提案している。古代からの歴史遺産が豊富な奈良には、多くの研究対象があり、その研究分野としての「奈良学」という言葉が定着している。住原によると、その「奈良学」の外国語表記は今までなかったが、グローバル化した現代社会を意識し、グローバルな視点に立った奈良の地域研究を指す言葉として「ナラロジー」があるという<sup>19)</sup>。

本研究が対象とする真言宗豊山派の近現代における外国との交流は、このナラロジーの恰好の研究事例となろう。本山・長谷寺は、古代の貴族にとっては主要な参詣地であり、近世にも徳川家からの保護を受けた古刹である。また「だだおし」の行事など、古代以来の民俗が現代に継承されていることが研究上の注目を集めることがある。しかし前近代を対象とした単なる日本の歴

史研究とは異なる、ナラロジーにとっての長谷寺の重要性は、今日に至るまで密教を学ぼうとする外国の人びとを受け入れ続けているというところにある。私は華人社会の研究者であり、香港、ベトナムの地域文化には個人的な関心があるが、それを越えたナラロジーという視点も持ちつつ、今後も調査を続けていきたいと考えている。

## 注

- 1) 一般には、中国にゆかりをもつが中国国外に居住する人びとのうち、現地の国籍をもつ人を「華人」、中国籍をもつ人を「華僑」として「学問的に」、「行政的に」かつ「民俗的に」分けることが多いが、本論文では、「華人」と「華僑」を分けずに、中国にゆかりをもつ人びと全てを「華人」としている。なお、本論文が主たる対象とするベトナムにゆかりをもつ華人は、今日のベトナムの民族分類のなかで、多くは「ホア (Hoa)」族となっている。
- 2) 1993年と1994年の調査は、高岡弘幸氏（現在、県立高知女子大学教授）との共同調査である。また、1999年から2001年にかけては、共同研究「ホア族の宗教施設の碑文に関する人類学的・歴史学的研究」（国際交流基金助成、研究代表者、香港科技大学・張兆和教授）、2004年から2007年にかけては、科学研究費補助金・基盤研究（A）「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類的研究」（研究代表者、東京外国語大学・三尾裕子教授）に研究分担者として加わることで実地調査を続けることができた。共同研究の関係者すべてのお名前をあげることはしないが、ここに記して、日本、香港、ベトナムの関係各位に謝意を表したい。
- 3) ホーチミン市における華人会館組織については [Serizawa 2006]、福建人と仏教との歴史的関係については [Serizawa 2007] を参照されたい。
- 4) [芹澤 2006: 87-88]
- 5) 2008年7月、豊山派宗務所に田中文雄師と川城孝道師をたずね、本研究に関わる意見交換の機会を持った。その時に両師のご研究をはじめとする豊山派内部の研究動向についてご教示を賜った。
- 6) [藤森 1998] [田中 2004] [田中・川城 2008]
- 7) 上述の注6) 以外の重要な基本文献としては、[岡田 1934] [杉本 1943] [桜井 1977] [守山 1997] がある。
- 8) 「海潮音」は、台湾で以前から復刊されており、日本でも比較的利用しやすい。最近中国本土では、中華民国期の仏教雑誌の復刻シリーズが続々と出版されてきており、戦前・戦中に中国南部で出版された日本密教に関わる雑誌や内部刊行物を多くの研究者が資料として直接利用することが可能となれば、当時の密教復興についての歴史的研究は今後さらに進むと期待できる。
- 9) [黄 1992: 220-227]
- 10) [肖 2003: 206-207]
- 11) [香港真言宗居士林・女居士林 1970]、[杉本 1943: 7-8]
- 12) [高 2000]
- 13) 例えば、扶乩を主な活動としている香港の「道壇」の多くは、現在も一般信者の治病のために処方する薬や符について、神からの指示を得るための公開儀礼の時間を設けている [志賀 2003: 65-66]。
- 14) チョロンの華人宗教施設のなかで「道教」を代表する「慶雲南院」は、中国広東省南海県茶山にある「慶雲洞」の南の分壇という意味で「南院」と名づけられている。なお、「慶雲洞」の香港の分壇は「通善壇」という。
- 15) [李 1972: 207]
- 16) [杉本 1943: 69-70, 79]
- 17) 徳教については吉原和男の研究が詳しい [吉原 1978]。
- 18) [藤森 1998: 111]、[田中 2004: 426-427]
- 19) [住原 2007: v-vi]

## 文献

(日本語)

岡田契昌

1934 「先師雷斧大僧正と震旦密教重興会の今昔」『大正大学学報』第18巻、98-112頁。

桜井栄章

1977 「真言教徒の中国開教」、中濃教篤編『講座日本近代と仏教 6 戦時下の仏教』国書刊行会、99-106頁。

志賀市子

2003 「中国のこっくりさん - 扶鸞信仰と華人社会」大修館書店。

杉本良智

1943 『華南巡錫』護国寺。

住原則也

2007 「はじめに」、住原則也編『グローバル化のなかの宗教 - 文化的影響・ネットワーク・ナラロジー』世界思想社、i-vii頁。

芹澤知広

2006 「世界遺産の保全と活用を支える社会的ネットワーク - 岐阜県白川郷とベトナム・ホイアンの事例から-」『総合研究所報』第17号、75-95頁。

田中文雄

2004 「密教重興とその後 - 日本仏教と中国在家教団の八十年-」宮澤正順博士古稀記念論文集刊行会編『宮澤正順博士古稀記念 東洋-比較文化論集』青史出版、415-435頁。

田中文雄・川城孝道

2008 「豊山開教略史稿 - 密教重興から居士林御親化へ-」『真言宗豊山派総合研究院紀要』第13号、95-119頁。

藤森孝道

1998 「真言密教重興と海外居士林」『豊山教学大会紀要』第26号、107-125頁。

守山聖真

1997 『真言密教史の研究』碩文社〔初版は1966年刊〕。

吉原和男

1978 「華人社会の民衆宗教 - 香港・潮州人社会の徳教-」、宗教社会学研究会編『現代宗教への視角』雄山閣、194-209頁。

(中国語)

黄英傑

1992 『民国密宗年鑑』台北：全佛文化出版社。

高永霄

2000 「從悼念慈祥法師的示寂 - 談香港佛教義學的始終」『香港佛教』第476期。

([http://www.hkbuddhist.org/magazine/476/476\\_11.html](http://www.hkbuddhist.org/magazine/476/476_11.html))

肖平

2003 「近代中国仏教の復興 - 与日本仏教界的交往録』広州：広東人民出版社。

香港真言宗居士林・女居士林

1970 『黎阿蘭梨乙真居士降生百週年紀念会刊』香港：香港真言宗居士林・女居士林。

李文雄編

1972 『越南文献下集』堤岸。

(英語)

Serizawa, Satohiro

2006 "Chinese Charity Organizations in Ho Chi Minh City, Vietnam: the past and present," Khun Eng Kuah-Pearce and Evelyn Hu-Dehart (eds.) *Voluntary Organizations in the Chinese Diaspora*, Hong Kong: Hong Kong University Press, pp. 99-119.

Serizawa, Satohiro

2007 “The Fujian Chinese and the Buddhist Temples in Ho Chi Minh City, Vietnam,” Yuko Mio (ed.) *Cultural Encounters between People of Chinese Origin and Local People: Case Studies from the Philippines and Vietnam, Proceedings of International Workshop*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 65-75.